



待つことで 社会にゆとりと潤いを

中部大学 学長 山下 興亜

12月になってから、テレビで白菜や大根などの冬物野菜が収穫されることなく、畑に埋め込められている光景を一度となく目にした。今年の秋は比較的高温でしかも雨にも恵まれたので、冬物野菜が豊作になり市場価額が暴落したためにとらざるを得ない市場経済の掟であるという。野菜生産農家にとっても断腸の思いでの作業であり、また、消費者にとっては「もったいない」の一言に尽きる行為である。人々の営みを時々の市場経済の論理だけで処しては、かけがえのない人間力をただ消費していることになり、これでは社会はとて持たない。

最近のもう一つの社会的な関心事に教育問題がある。いじめによる児童の自殺とか学力低下とか、はたまた愛国心の希薄化までも取りざたされている。教育界の片隅に身を置いている者として心を痛めている。百術千慮、いろんな取り組みが国を挙げてなされているが、安全養育マニュアルが先行し、規格外の生きる力を粗末にしかねない状況にある。これでは進化する社会はとて望めない。「道草を食う馬は肥える」のである。

人間はその誕生の経緯から、孤立しては生きられなく、超个体つまり集団としての社会を形成することによってはじめて生存できるのである。生物社会は相対する二元的な要素と仕組みを開発し、その発現を制御する装置を完備している。生物社会の作動原理は、二者択一的なデジタル行為ではなく、常に矛盾を内在し、しかも統一しているから進歩するのである。この一例を昆虫の世界に拾ってみよう。

私は昆虫と40年近く付き合ってきた。昆虫はこの世で最も繁栄を極めている生物種であり、全生物種の約6割を占めている。地球は昆虫の惑星と呼ぶにふさわしい存在である。この昆虫の繁栄は3億5千万年に及ぶ年月をかけて開発してきた多様な生き様の蓄積によっている。私が最も興味を持った生き様は休眠である。休眠は睡眠や冬眠と親類関係にある生命現象であり、飲み食いを一切止め、徹底した省エネルギー体制を組み、運動や成長を完全に停止し、生命の維持・保存のための機構である。

例えば、カイコは成長に最適な環境であり、かつ食料資源の最も豊富な7月の始めに休眠に入り、約10ヶ月間休眠し、翌年の5月から始まるわずか2ヶ月間だけ活動し、変態や生殖を行って、間違いなく世代を繋いでいく。カイコは環境が悪くなりまた食料が無くなったから休眠するのではなく、最も恵まれた時期に計画的に休眠するのである。人間の生存戦略にはない生き様である。休眠することは一定の発育段階に達した個体が成長の遅れた個体の成長を「待ち」、個体間のばらつきを修正し、集団の生殖能力、つまり次世代生

産力を最大にすることである。生物の世界では個体の能力は集団の能力によって評価されるので、生物社会の繁栄はいうなれば集団としての活動能力によって決められる。だから、個体の生き様は休眠というかなり強引な制御系の発動によって社会的な生き様へと転換されているのである。この個を組織へと転換させる仕組みは、他を「待つ」と言う論理を開発し導入することによって完成したのである。個がそれぞれ独立に成長し続けるならば、それは集団や社会を破滅に導くことになる。

ところで、私たちの日常生活の中からも「待つこと」はかなり失われつつある（『「待つ」ということ』 鷺田精一著、角川選書、2006）。携帯電話をこの国の人々の8割が持つようになり、「待ち合わせ」のかたちは大きく変わり、ぼんやりと、しかし苛立ちながら潰す時間がめっきり減った。ものを長い目で見る余裕がなくなったと言える。1年単位の数値目標を掲げその達成度を評価し、結果がでていなければその事業を打ち切り、決して待つことをしない。「待つこと」は未来を探ることであり、目標に挙げられないこと、予期できないことや偶然起こることを期待することである。今一度、「待つこと」を取り戻し、ゆとりある社会と潤いのある生活を手にしたいものである。